5万トン時代へ

青森リンゴ輸出

6

上海に進出 販路を拡張

皆川洋行

皆川藤吉（1842～1914）は北山一郎に遅れることわずか1年、1910（明治43）年に中国・上海に「皆川洋行」を設立している。弘前市の出身で、もともとはてんびんで果物を仕入れ、小売りや振れ売りを行っていた。1896年に弘前師団の新設が決まると軍の御用商人となり、青果物を納入するようになり、それから家運が興隆したとのことである。

その後、家業を長男に譲ると、皆川は、もっぱらリンゴ移出に努めた。当時のリンゴ士族の勉強会に参加し、リンゴを学んでいく中で、持ち前の熱心さと進取の気性を発揮して、海外輸出に目を向けたとされている。

当時の弘前新聞は、皆川の上海進出の着眼について次のように紹介している。

「りんごの産出額増加しに来るに伴い余は販路拡張の必要を自覚し、国内に長崎までの各都市に販路を求むるを得、逐年の生産増加は需要増加を超えること甚だしく価格の下落を見るや将来に少なからずの杞憂を抱き、いかなる難を排しても国外に販路を拡張する必要を悟り、上海へ向けて発途せし」―。

驚くことに、まさに青浦商会の北山一郎とまったく同様の視点を持って海外に進出しているのである。

皆川の輸出への取り組みは1899年の上海の調査に始まり、1903年のウラジオストクの調査を経てから、06年に上海向けの挑戦が始まっている。上海向けは苦労の連続だったようで、最初の2年間は持って行った500箱がまったく売れず、3年目にやっと200箱売れた。4年目の09年に一躍3500箱を完売し成功を収める。そして翌10年、上海に「皆川洋行」を開店したのである。

その後、逐次業績を発展させ、販路も上海から香港、ハワイまで拡大したが、14年の皆川の死去と、中国の日貨排斥運動の巻き添えで閉店に追い込まれている。

明治時代にリンゴを作り始めてわずかしかたっていない時期に、リンゴ輸出を始めた先人の足跡を垣間見て、そのスケールの大きさ、そのすごさに深く感銘を受けたものである。

あなたたちは本当にすごい！

（県りんご輸出協会事務局長　深澤守）

リンゴの海外輸出に目を向け、中国・上海に「皆川洋行」を設立した皆川藤吉㊧（青森県りんご百年史から）